

12歳～17歳における聴覚障害児の発育と体力・運動能力 身長、体重、握力、ハンドボール投げの結果から

渡邊明志 岡本三郎
荒川郁朗 苦瓜道代

筑波大学附属聾学校（現、筑波大学附属聴覚特別支援学校）における1988年度から2005年度までの中学部新入生の身長、体重、握力、ハンドボール投げの年次推移を調査するとともに、それら4調査項目間の統計的分析から、握力とハンドボール投げに影響を与える関連因子を探った。その結果、1) 発育状況を表す身長と体重は、12歳、15歳、17歳の男女とも全国平均とほぼ同水準にあること、2) 女子の握力とハンドボール投げは、全国平均レベルにあること、3) 身長と体重との重回帰分析の結果から、男子の握力に影響を与えたのは12歳では身長、15歳及び17歳では身長と体重であり、女子については12歳、15歳、17歳のいずれかにおいても体重の影響が強いこと等が示唆された。

【キーワード】 聴覚障害児 12歳～17歳 身長 体重 握力 ハンドボール投げ
年次推移 重回帰分析

1 はじめに

筑波大学附属聴覚特別支援学校は、本邦の聴覚障害教育機関において幼稚部から高等部までのすべての学部を有する中核の大規模校の類に属する。その特色を生かして、本校体育科では、学部間の連携を重視した学部・学年の授業者配置や体育的行事、研究活動等に取り組み、保健体育の授業実践から幼児児童生徒の身体的・運動的特質や発育・発達等の領域に至るまで幅広く課題追究を行っている。

さて聴覚障害児の発育及び体力・運動能力の現状は、今どようになっているのであろうか。この点に関して、1970年以降これまで障害児教育に携わる教育研究者らによって全国的な調査が実施され、その推移や傾向が明らかにされてきた。しかし、2007年度から始まった特別支援教育への制度転換の影響を受け、その実態はしだいに見えにくくなりつつある。

それは、これまで聾学校とされてきた特別支援学校に、他の障害を有する子どもがこれまで以上に在籍するようになってきた現状がある。このような状況では先行研究で行われてきた調査法、すなわち日本全国の聴覚障害児を対象とした単年度調査では母集団の適性規模やデータの妥当性等の観点から疑問符が付き不透明感を残すことは否めなくなっている。より正しく実態を反映する確かな調査法が必要である。

聴覚障害教育の現場を取り巻くこのような状況を踏まえ、本研究では広範囲的な調査を求めず、対象を特定の一学校に絞り、縦断的かつ統計学的な視点から聴覚障害児の実態を明らかにしようと考えた。すなわち、本校中学部及び高等部に在籍した生徒に着眼し、1988年度から蓄積している同一生徒（連絡進学者）の12歳から17歳までの発育記録及び体力・運動能力テストの記録をデータベース化し、そこから聴覚障害児の特質を明らかにすることを目的とした。

2 対象と方法

(1) 対象児

過去に本校に在籍した1988年度中学部入学者から2005年度中学部入学者までの生徒延べ254名を調査対象とした。その内訳は男子139名、女子115名である。各年度別の入学者数を表1に示す。過年度別のケースや未測定項目がある者は調査対象から除外し、同一生徒の12歳から17歳までの記録を追跡的に調査した。なお本研究では、便宜的に12歳、15歳、17歳の3つの年齢段階のデータを抽出し、縦断的かつ段階的な発育・発達の変化をみることにした。

(2) 調査項目と記録方法

毎年4～5月に実施されている身体計測から発育状況を示す(1)身長と(2)体重、体力テストから

表1 年度別中学部入学者数 (名)

年度	男子	女子
1988	9	5
1989	9	6
1990	12	5
1991	8	4
1992	6	11
1993	10	4
1994	10	6
1995	6	11
1996	6	11
1997	10	8
1998	3	9
1999	8	4
2000	11	5
2001	8	5
2002	4	5
2003	7	3
2004	5	7
2005	7	6
合計	139	115

主に上肢筋群に関わる(3)握力と(4)ハンドボール投げを調査項目とした。一般的に握力は全身筋力との相関性が高いとされ、ハンドボール投げは上肢の筋パワーと投能力の一指標とされている。

握力の記録方法は左右交互に2回ずつ計測を行い、記録はkg単位とし、kg未満(小数第1位)は切り捨てた。左右おのおののよい方の記録を平均し、kg未満は四捨五入した。ハンドボール投げは、ハンドボール2号球(外周54～56cm・重さ325～400g)を用いて、直径2mの円内から投球した。2回実施してよい方の記録をとった。記録はm単位とし、m未満は切り捨てた。ちなみに投球のフォームは基本的に自由であるが、下手投げをせずに、ステップして投げた方が記録が良く出やすい。

(3) 調査方法

調査①

前述した年齢段階(12歳、15歳、17歳)の身長、

体重、握力、ハンドボール投げについて、単年度ごとに平均値を算出した。対象期間は、12歳は1988年度から2005年度、15歳は1991年度から2008年度、17歳は1993年度から2010年度までの18年間の推移である。また対象児の平均水準がどのあたりに位置しているかを検討するために、比較参考値として1999年度以降の全国平均データ(政府統計)を用いた。

調査②

対象児の身長、体重、握力、ハンドボール投げのテスト結果から、次の検証課題を検討するために統計的分析を試みた。検証課題は、(A)身長と体重は、握力の強さにどの程度影響を与えているのか、(B)身長、体重及び握力はハンドボール投げの記録にどのくらい影響を及ぼしているのか、の2つである。

まず対象者の属性について単純集計及びクロス集計を行い、調査対象者の特性や傾向を明らかにした。さらにピアソンの積率相関係数を用いてすべての変数間で相関マトリックスを作成し、独立性と内部相関を検証した。次いで(A)では握力を従属変数、身長、体重を独立変数とし、(B)ではハンドボール投げを従属変数、身長、体重、握力を独立変数に設定して重回帰分析を行った。(A)と(B)いずれも独立変数の選択法は強制投入法とし、性別ごとに検証した。すべての項目において危険率5%を有意水準とした。

3 結果及び考察

(1) 調査項目の推移傾向について

本項では全国平均値の推移に合わせて、1999年度以降の結果について結果と考察を述べる。それ以前(1988年度～1998年度)の結果については、後に示す各図の推移線を参照されたい。

①身長

図1は、身長の本校生徒平均と全国平均の年次推移を年齢別に示したものである。

12歳の本校男子生徒は、1999年度から2003年度までの5年間連続して全国平均を下回ったが、2004年度と2005年度では全国平均より若干上回った。最高は2005年度の154.2cm、最低は2002年度の148.7cmである。一方、12歳の本校女子生徒は、1999年度か

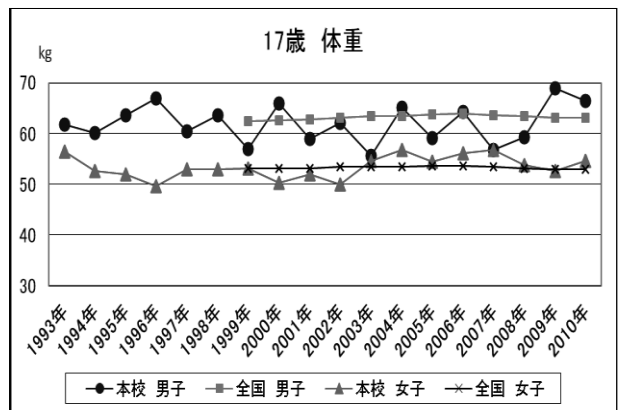
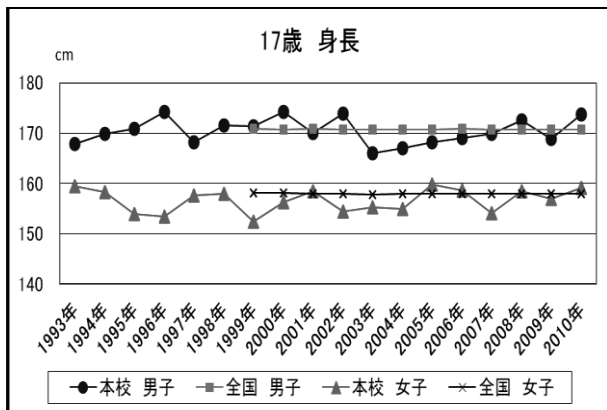
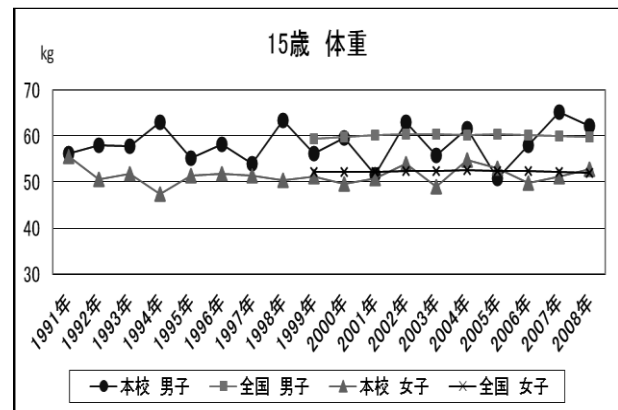
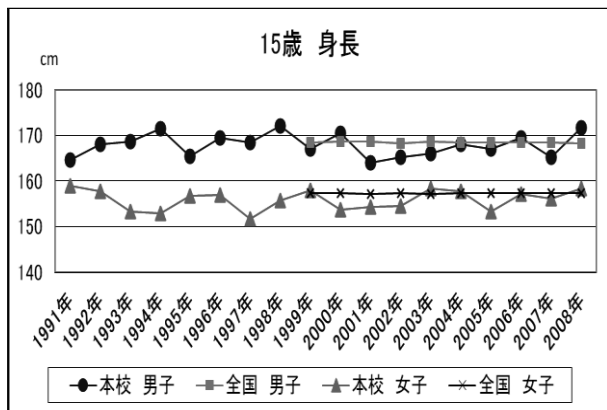
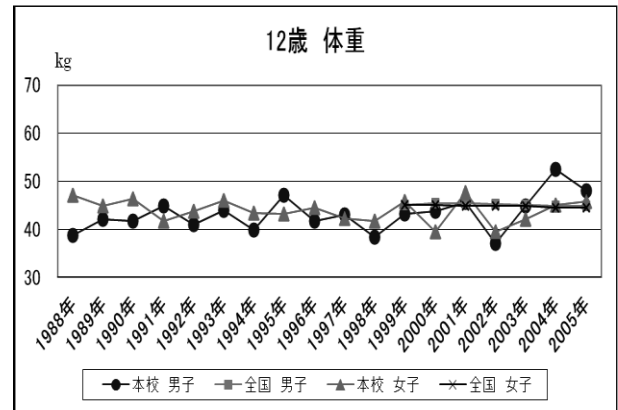
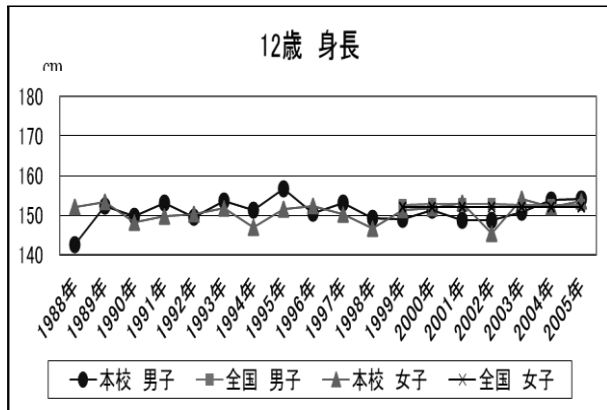


図1 身長

図2 体重

ら2002年度まで全国平均をやや下回る傾向を示したが2003年度以降は全国平均とほぼ同じ水準であった。最高は2003年度の154.1cm、最低は2002年度の145.4cmである。12歳ではまだ男女間に明らかな差が生じていないことが見て取れる。

15歳の本校男子生徒は、2001年度などやや低水準を示した年度もあるが、逆に上回った年度も見られ

た。最高は2008年度の171.6cm、最低は2001年度の164.1cmであった。15歳の本校女子生徒も男子と同様に全国平均を下回る年度があったが、若干上回る年度も見られた。最高は2003年度及び2008年度の158.4cm、最低は2005年度の153.4cmである。男女間の差を見ると、両者の差は明らかになっており、特に男子の成長が著しい。

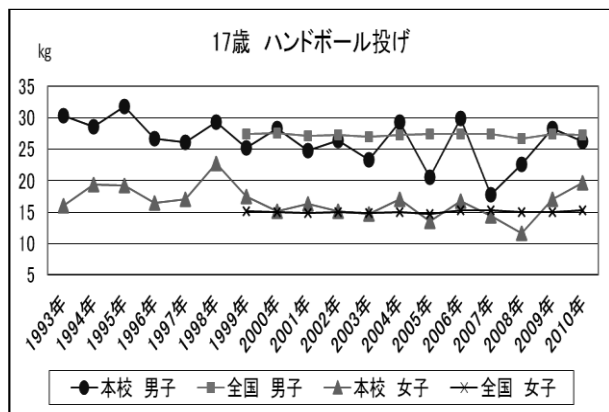
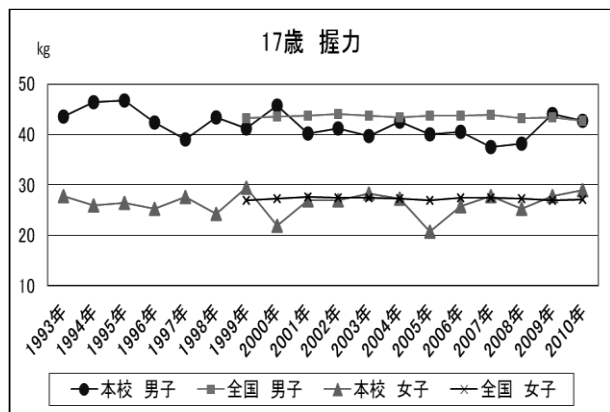
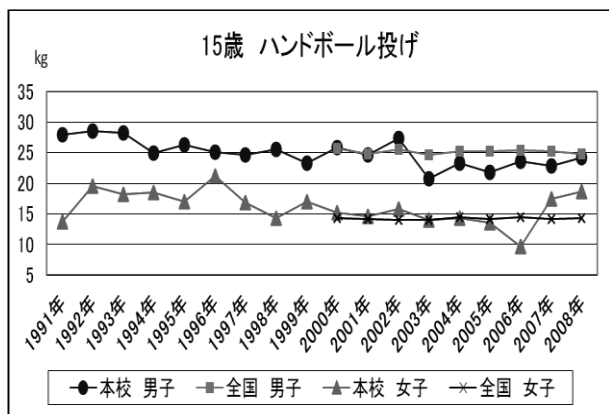
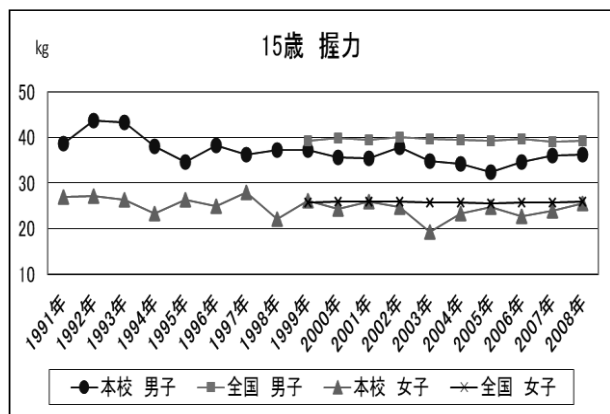
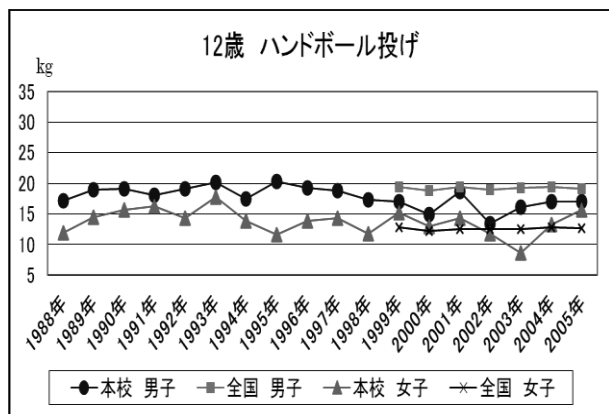
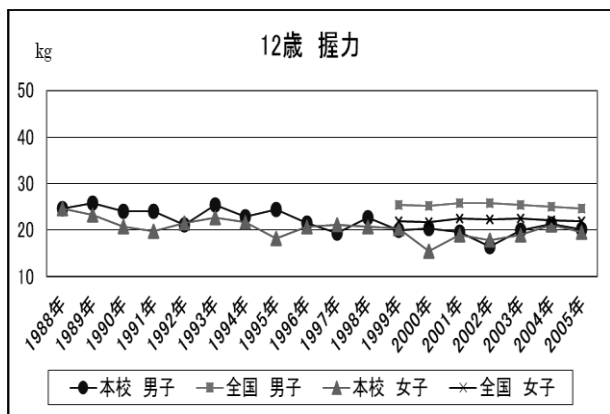


図3 握力

図4 ハンドボール投げ

17歳の本校男子生徒は、2003年度などやや低水準を示す年度もあったが、逆に上回る年度もあった。最高は2000年度の174.2cm、最低は2003年度の166.1cmである。17歳の本校女子生徒も男子と同様に全国平均を下回る年度があれば、逆に若干上回る年度もあった。最高は2005年度の159.8cm、最低は1999年度の152.4cmである。

②体重

図2は、体重の本校生徒平均と全国平均の年次推移を年齢別に示したものである。

まず12歳の本校男子生徒の推移は、年度ごとのばらつきが顕著で変動が大きいのが特徴的である。最高は2004年度の52.4kg、最低は2002年度の37.1kgであった。12歳の本校女子生徒も男子と同様に年度に

よって大きな変動があり、最高は2001年度の47.6kg、最低は2002年度の39.5kgであった。

15歳の本校男子生徒も、12歳の推移以上に年度ごとのばらつきが顕著ある。最高は2007年度の65.3kg、最低は2005年度の50.8kgであった。一方、15歳の本校女子生徒は、12歳段階よりも推移の変動が若干緩和された傾向を示し、最高は2004年度の54.9kg、最低は2003年度の48.9kgだった。

17歳の本校男子生徒は15歳とほぼ似たような推移傾向を示し、最高は2009年度の68.9kg、最低は2003年度の55.6kgだった。17歳の本校女子生徒も、15歳とほぼ同じ推移傾向を示し、2003年度以降に関しては全国平均と同水準かやや上回った結果となった。最高は2004年度及び2007年度の56.8kg、最低は2002年度の50.0kgであった。

③握力

図3は、握力の本校生徒平均と全国平均の年次推移を年齢別に示したものである。

12歳の本校男子生徒はすべての年度で全国平均を下回り、低水準の推移傾向を示した。最高は2004年度の21.4kg、最低は2002年度の16.5kgである。12歳の本校女子生徒も男子ほどではないが、すべての年度で全国平均を下回り、低水準の推移傾向を示した。最高は2004年度の21.1kg、最低は2000年度の15.4kgである。

15歳の本校男子生徒は12歳と同様、すべての年度で全国平均を下回り、低水準の推移傾向を示した。最高は2002年度の37.8kg、最低は2005年度の32.5kgである。一方、15歳の本校女子生徒は、低水準の推移傾向を示しているものの、全国平均に近づいている年度も散見された。最高は1999年度の26.1kg、最低は2003年度の19.3kgであった。

17歳の本校男子生徒は2000年度が全国平均を上回り、その他は全国平均と同等か、それ以下の低水準の推移傾向を示した。最高は2000年度の45.8kg、最低は2007年度の37.5kgである。一方、17歳の本校女子生徒は、2000年度と2005年度を除くすべての年度でほぼ全国平均値に追いつき、同水準傾向を示した。最高は1999年度の29.5kg、最低は2005年度の20.8kg

であった。

④ハンドボール投げ

図4は、ハンドボール投げの本校生徒平均と全国平均の年次推移を年齢別に示したものである。

12歳の本校男子生徒はすべての年度で全国平均を下回り、低水準の推移傾向を示した。最高は2001年度の18.6m、最低は2002年度の13.5mである。一方、12歳の本校女子生徒は、2003年度以外はおおよそ全国平均を上回るか同等の水準にあった。最高は2005年度の15.7m、最低は2003年度の8.7mである。

15歳の本校男子生徒は、2002年度で全国平均を上回ったがそれ以降は低傾向を示した。最高は2002年度の27.4m、最低は2003年度の20.7mである。一方、15歳の本校女子生徒は、2006年度以外は全国平均を上回るか同等の水準にあった。最高は2008年度の18.7m、最低は2006年度の9.7mである。

17歳の本校男子生徒は、15歳と比べ推移の変動が大きくなっている。最高は2006年度の29.9m、最低は2007年の17.8mであった。17歳の本校女子生徒は、2008年度以外は、全国平均を上回るか同等の水準にあった。最高は2010年度の19.7m、最低は2008年度の11.7mであった。

これらの結果から本校生徒の推移傾向は、少人数で平均値を算出しているため年度ごとの変動が生じやすく、安定した推移傾向を示しにくい側面を持つ。一般的傾向として評価するには不十分さを残すが、巨視的に推移を概観すれば、発育状況を表す身長と体重は、12歳、15歳、17歳の男女とも全国平均とほぼ同じ水準にあると見てよいのではないだろうか。また、握力に関して、男子はやや全国平均を下回るが、女子は15歳と17歳でほぼ同水準の傾向を表している。ボール投げについても全国平均と同水準の推移傾向を示し、本校女子生徒は全国平均レベルにあると言える。

これまでの全国調査では、聴覚障害児の体力・運動能力は健聴児に及ばないとされてきた。しかしながら本校女子生徒は、全国平均とおおよそ変わらない結果を得た。これはなぜだろうか。

この理由として、第一に中学部、高等部の課外活

表2 対象者属性

男子		身長 (cm)	体重 (kg)
12歳	n = 139	151.0±8.4 (131.5～175.4)	43.1±10.1 (24.4～91.4)
15歳	n = 139	168.1±6.0 (153.8～185.5)	58.4±11.6 (36.8～107.0)
17歳	n = 139	170.6±5.8 (156.4～187.4)	62.2±10.6 (38.0～109.0)
平均値±標準偏差(範囲)			
女子		身長 (cm)	体重 (kg)
12歳	n = 115	150.8±6.3 (136.3～166.1)	43.8±7.5 (28.0～62.8)
15歳	n = 115	155.9±5.5 (141.8～168.7)	51.4±6.6 (37.9～65.6)
17歳	n = 115	156.7±5.5 (143.0～170.1)	53.1±6.8 (37.0～70.5)
平均値±標準偏差(範囲)			

動で日々活発に取り組まれている運動部（部活動）の存在が考えられる。本校中学部の場合、全生徒が運動部のいずれかに属しており（女子は陸上競技、卓球、バレーボール）、高等部でも運動部（女子は陸上競技、卓球、バレーボール、水泳）に属している生徒は多い。

第二に、小学部における運動実践が関与していることが考えられる。すなわち、年間を通して小学部児童はドッジボール遊びを行っており、それが握力とハンドボール投げの結果に大きく貢献しているのではないかという推測である。ボールをつかむ動作は当然握力の強化につながり、速いボールを投げようとすればそれだけ全身を使った合理的な投げ方が求められてくる。因果関係としてはかなり有力である。

このような学校内での運動習慣が、女子の握力と

ハンドボール投げを全国平均まで押し上げている一因と考える。しかし、第二の理由に関しては、さらに小学部段階、すなわち12歳以前の体力データの検討が不可欠である。今後の検討課題としたい。

(2) 発育項目と握力、ハンドボールの関係

統計的分析を行うにあたり、長い歳月をかけて蓄積した項目データを一括りにして処理するのは、他の要素（時代的生育環境、生活様式の変化等）の影響が多分に生じてくる恐れがあり、あまり好ましいことではない。しかし、ここではこれまでの本校に見る特質や全体像を明らかにするために、あえて18年分の項目データを圧縮した形で統計的分析を行うこととした。

表2は対象者の属性を表す。男子の身長について、12歳は151.0±8.4cm、15歳は168.1±6.0cm、17歳は

表3 握力、ハンドボール投げ結果

男子			平均	標準偏差	最大値	最小値
握力 (kg)	n = 139	12歳	22.1	6.2	40.0	10.0
		15歳	37.2	7.3	64.0	17.0
		17歳	42.3	7.6	64.0	21.0
ハンドボール投げ (m)	n = 139	12歳	17.8	5.1	31.0	7.0
		15歳	25.2	5.7	43.0	10.0
		17歳	26.9	6.7	50.0	9.0

女子			平均	標準偏差	最大値	最小値
握力 (kg)	n = 115	12歳	20.6	5.1	47.0	9.0
		15歳	24.9	4.4	34.0	13.0
		17歳	26.4	4.5	36.0	13.0
ハンドボール投げ (m)	n = 115	12歳	13.7	3.7	23.0	5.0
		15歳	16.2	4.3	27.0	7.0
		17歳	16.6	4.4	27.0	8.0

170.6±5.8であった。体重は、同じく43.1±10.1kg、58.4±11.6kg、62.2±10.6kgである。一方、女子の身長は、12歳が150.8±6.3cm、15歳は155.9±5.5cm、17歳は156.7±5.5cmであった。体重は、同じく43.8±7.5kg、51.4±6.6kg、53.1±6.8kgである。

表3は握力、ハンドボール投げの調査結果を表している。12歳、15歳、17歳における男子の握力はそれぞれ22.1±6.2kg、37.2±7.3kg、42.3±7.6kgであった。ハンドボール投げはそれぞれ、17.8±5.1m、25.2±5.7m、26.8±6.7mである。女子の12歳、15歳、17歳における握力は、20.6±5.1kg、24.9±4.4kg、26.4±4.5kg、ハンドボール投げは13.7±3.7m、16.2±4.3m、16.6±4.4mであった。

表4に性別ごとの身長、体重、握力及びハンドボール投げの単相関係数を表す。すべての項目はそれぞれ相互に有意な相関関係を示した。数値だけではイメージしにくいいため、図5に視覚的にわかりやすく表した。

この分析結果を受けて、まず課題(A)の握力(従

属変数)と身長及び体重(独立変数)との関係を検討するために重回帰分析を行った。表5はその結果である。決定係数は、男子12歳が0.418であり、身長と体重から握力の41.8%が説明された。同様に男子15歳、同17歳の決定係数はそれぞれ0.262と0.306だった。因みに決定係数は、重相関係数の2乗で表され、独立変数が従属変数のどれくらいを説明できるかを表す。言い換えれば、モデルのあてはまりの良さである。男子12歳における重回帰式は[握力Y=0.375身長+0.105体重-39.005]である。この標準偏回帰係数は身長0.511、体重0.172であり、体重よりも身長が有意に影響を及ぼした。一方、男子15歳[握力Y=0.300身長+0.213体重-25.745]と男子17歳[握力Y=0.313身長+0.282体重-28.607]の標準偏回帰係数は、15歳が身長0.245、体重0.335、17歳は身長0.240、体重0.393となり、12歳とは逆に若干体重が握力に影響を及ぼす結果になった。

女子について、握力に対する身長、体重の決定係数は、12歳が0.347、15歳は0.340、17歳が0.243であっ

表4 変数間の相関マトリックス

男子		体重	握力	ボール投げ
身長	12歳	0.724 **	0.636 **	0.489 **
	15歳	0.544 **	0.427 **	0.323 **
	17歳	0.499 **	0.436 **	0.249 **
体重	12歳		0.542 **	0.341 **
	15歳		0.469 **	0.286 **
	17歳		0.513 **	0.395 **
握力	12歳			0.682 **
	15歳			0.553 **
	17歳			0.641 **

** : p < .01

女子		体重	握力	ボール投げ
身長	12歳	0.642 **	0.461 **	0.272 **
	15歳	0.463 **	0.380 **	0.319 **
	17歳	0.457 **	0.344 **	0.310 **
体重	12歳		0.577 **	0.388 **
	15歳		0.568 **	0.288 **
	17歳		0.471 **	0.293 **
握力	12歳			0.490 **
	15歳			0.458 **
	17歳			0.463 **

** : p < .01

た。重回帰式は12歳が〔握力 $Y=0.126$ 身長 $+0.326$ 体重 -12.671 〕であり、標準偏回帰係数は身長が0.155、体重は0.478であった。15歳は〔握力 $Y=0.119$ 身長 $+0.334$ 体重 -10.897 〕であり、標準偏回帰係数は身長が0.148、体重は0.500であった。17歳では〔握力 $Y=0.134$ 身長 $+0.264$ 体重 -8.534 〕であり、標準偏回帰係数は身長が0.162、体重は0.397であった。いずれの年齢においても体重が有意に握力に影響を与えた。

まとめると、検証課題（A）に関して男子の握力

に影響を与えているのは、12歳では身長であり、15歳及び17歳では身長と体重（身長<体重）であった。一方、女子の握力については、12歳、15歳、17歳すべての年齢段階で体重の影響を強く受けていた。

表6はハンドボール投げ（従属変数）と身長、体重及び握力（独立変数）の重回帰分析の結果である。決定係数は男子が12歳0.480、15歳0.316、17歳0.421、女子は12歳0.257、15歳0.234、17歳0.241であった。参考までに自由度調整済みの決定係数も記した。これは独立変数が多くなるほど決定係数が良くなるこ

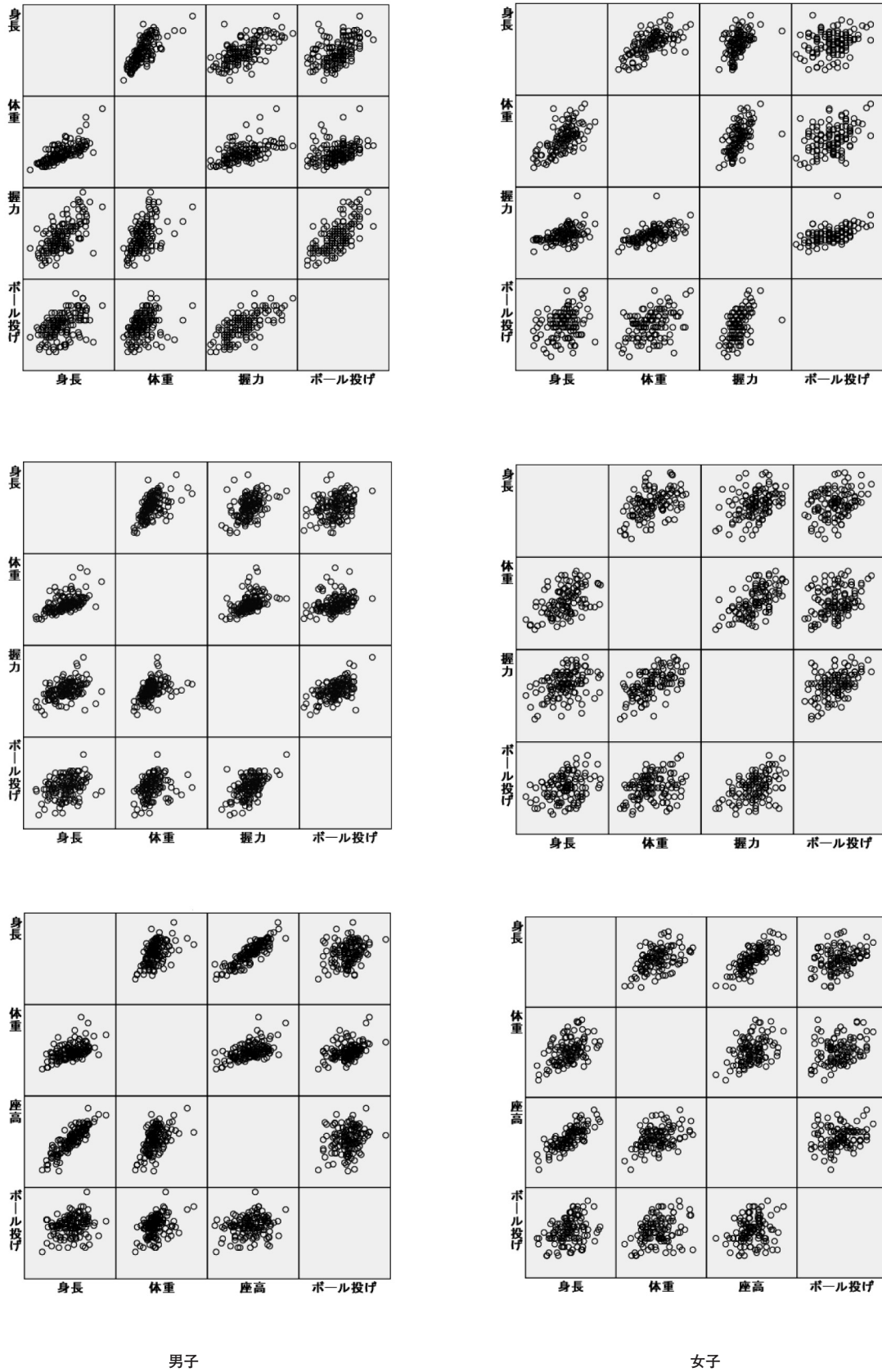


図5 変数間の相関関係図
(上段：12歳、中段：15歳、下段：17歳)

表5 握力における重回帰分析結果

男子					
従属変数	年齢	独立変数	標準偏回帰係数	有意水準	重決定係数
握力	12歳	身長	0.511	0.000	0.418
		体重	0.172	0.071	
	15歳	身長	0.245	0.006	0.262
		体重	0.335	0.000	
	17歳	身長	0.240	0.004	0.306
		体重	0.393	0.000	
女子					
従属変数	年齢	独立変数	標準偏回帰係数	有意水準	重決定係数
握力	12歳	身長	0.155	0.124	0.347
		体重	0.478	0.000	
	15歳	身長	0.148	0.090	0.340
		体重	0.500	0.000	
	17歳	身長	0.162	0.082	0.243
		体重	0.397	0.000	

とを考慮した補正值を表す。

結果を見ると男子、女子の標準偏回帰係数で有意水準に達したのはすべて握力のみであり、どの年齢段階においても握力がハンドボール投げに有意に影響を及ぼした。つまり、検証課題(B)については、男子、女子ともハンドボール投げの記録に影響を与えているのは握力であることが示唆された。

ただし、男子12歳体重(-0.139)や同15歳体重(-0.015)など、女子17歳ハンドボール投げを除いた各年齢で、標準偏回帰係数の符号にマイナスがついた。前述した単相関行列からみるとこの結果は不自然と思われ、多重共線性が発生している可能性が考えられた。

5 まとめ

本研究では、1988年度から2005年度における筑波大学附属聾学校(現、筑波大学附属聴覚特別支援学校)中学部新入生の身長、体重と握力、ハンドボ-

ール投げの測定値を全国平均の年次推移と比較検討し、その特性を明らかにしようとした。またそれら4調査項目間において、握力とハンドボール投げに影響を与える関連因子を探ることを目的に、統計的分析を試みた。そして以下のような結果が得られた。1)本校生徒の年次推移は、年度ごとのデータ数が少ないため変動が生じやすく、安定した推移傾向を示しにくい。一般的傾向として評価するには十分とは言えないが、巨視的に推移を概観すれば、発育状況を表す身長と体重は、12歳、15歳、17歳の男女とも全国平均とあまり変わらない水準にあると考えられる。

2)本校生徒の握力に関して、男子は全体的に全国平均を下回る推移を示したが、女子は15歳と17歳でほぼ同水準の傾向を表した。ハンドボール投げについても全国平均と同水準の推移傾向が示され、本校女子の握力とハンドボール投げは全国平均レベルにあると推測される。

表6 ハンドボール投げにおける重回帰分析結果

男子							
従属変数	年齢	独立変数	標準偏回帰 係数	有意水準	重相関 係数	重決定 係数	調整済み重決定係数
ボール投げ	12歳	身長	0.182	0.069	0.693	0.480	0.468
		体重	-0.139	0.128			
		握力	0.642	0.000			
	15歳	身長	0.112	0.201	0.562	0.316	0.300
		体重	-0.015	0.864			
		握力	0.513	0.000			
	17歳	身長	-0.078	0.318	0.649	0.421	0.408
		体重	0.120	0.146			
		握力	0.613	0.000			
女子							
従属変数	年齢	独立変数	標準偏回帰 係数	有意水準	重相関 係数	重決定 係数	調整済み重決定係数
ボール投げ	12歳	身長	-0.024	0.826	0.507	0.257	0.237
		体重	0.171	0.148			
		握力	0.402	0.000			
	15歳	身長	0.176	0.066	0.484	0.234	0.214
		体重	-0.022	0.835			
		握力	0.403	0.000			
	17歳	身長	0.159	0.096	0.491	0.241	0.220
		体重	0.036	0.719			
		握力	0.391	0.000			

3) 本校生徒の握力について、身長と体重との重回帰分析の結果から男子の握力に影響を与えているのは、12歳では身長であることが示された。そして同15歳及び同17歳では身長と体重（身長<体重）、双方の影響を受けていた。一方、女子の握力は、12歳、15歳、17歳すべての年齢段階において体重の影響を強く受けることが示された。

4) 本校生徒のハンドボール投げについて、身長、体重、握力のうち男子、女子ともにすべての調査年

齢において影響を与えたのは握力であった。

これらの結果から、今後の体育指導では特に男子の筋力の向上を目的としたトレーニングや指導内容を検討していく必要があると思われる。一方、女子については現在の筋力水準を維持し、さらに運動・スポーツに興味を持てるような取り組みを図りたい。また本研究は、身長、体重、握力、ハンドボールのみの調査としたが、他の体力・運動能力のテスト項目との関連も考慮して、本校にみる聴覚障害児

の発育・体力特性を多角的に明らかにしていく必要がある。

本校体育科における幼児児童生徒の指導のねらいの一つに、「同年齢の健聴児と同等の基礎体力水準を保持し、運動・スポーツの基礎技術や身体動作を獲得させていく」ことがある。冒頭でも述べたとおり、体育科では学部間の連携を念頭に置きながら指導カリキュラムを組んでおり、そこには各年齢段階の子どもたちの発育・発達はどうかという一貫した問題意識が欠かせない。所属学部内の個々の実践や運動行事の指導にとどまらず、中・長期的な視点から見た運動・スポーツのあり方、すなわち、幼少の運動遊びから学校卒業後のスポーツライフに至るまでの長期的かつ包括的な見方や共通認識が重要と考える。

誤解を恐れずに言うなら、聴覚障害児の運動指導は常に困難とチャレンジを伴う。健聴児と聴覚障害児の運動環境や指導方法の違い・位置づけを明確にし、子どもたちの資質や能力を伸ばしていくことは我々の大きな挑戦でもある。

今後も発育及び体力・運動能力の実態把握と分析を継続し、聴覚障害児の健全な発育・発達を見据えた合理的な運動指導を行っていく必要がある。

文献・資料

浅野勝己・岡本三郎（1994）聴覚障害児童生徒の体力特性報告書

及川力・橋本有紀・齊藤まゆみ・稲垣敦（2005）教育形態の違い（統合教育と分離教育）が聴覚障害者の体力や運動能力に与える影響. 日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書

齊藤まゆみ（2011）聴覚障害者の体力・運動能力と視機能. 障害者スポーツ科学, 9（1）：3-14

政府統計ホームページ

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do>